

第15回大学図書館学術資料講演会要旨
上方文化と西鶴
 ～関西学院大学図書館所蔵西鶴本書誌について～

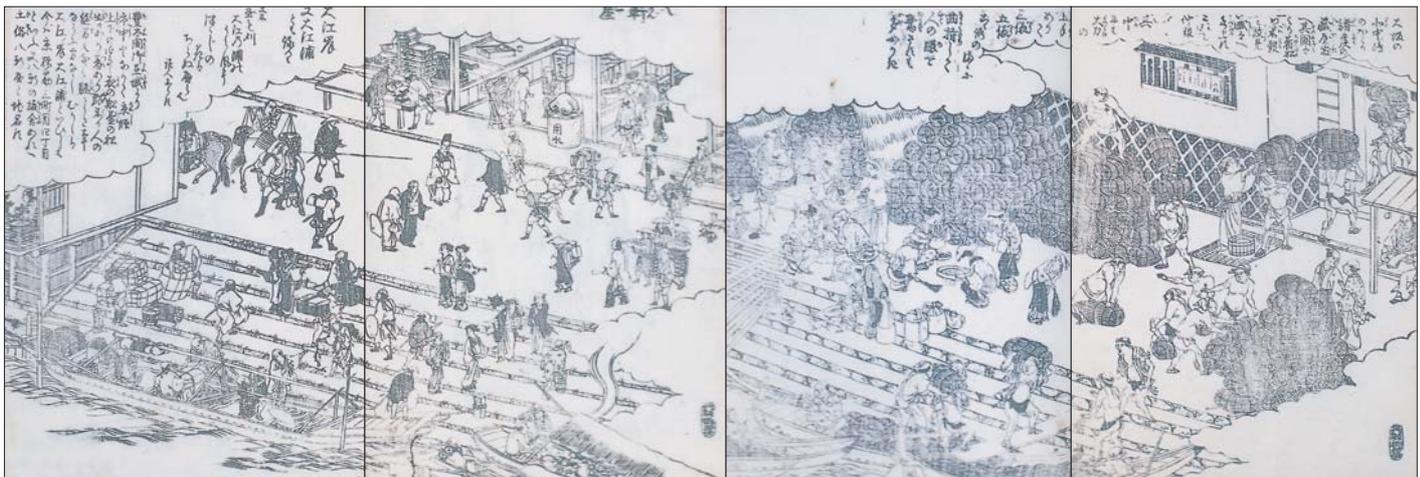
文学部教授 森田 雅也

【I】上方の繁栄～海運～

江戸幕府は、開幕（1603年）とともに江戸を中心とした交通網の整備に心血を注いだ。開幕以降推進された東海道など五街道の本格的な整備は物流の利用を企図していることは明らかであった。一里塚、街道の石敷きによる舗装、並木の植え付けなどは、この陸路を用いる人々の利便を考えてのことであったが、1635年に参勤交代を定めたあとは、通行量は飛躍的に伸び、街道を中心とした物資輸送は本格化する。各宿場の制度・機構も整備され、各宿場に常備すべき人足と馬も定められ、モノを運ぶ便宜はさらに向上していくのである。

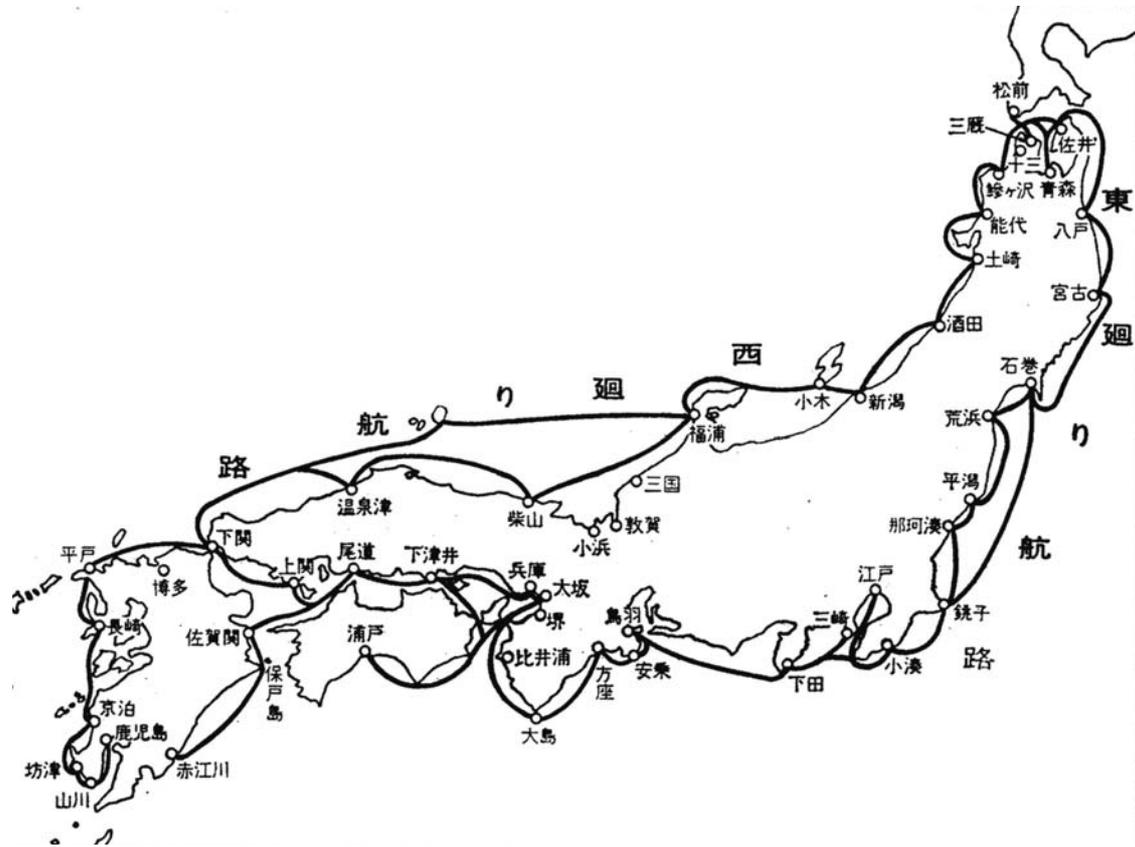


〔写真左〕3) 摂津名所図会 八軒家（大坂部四上）
 〔写真右〕4) 摂津名所図会 中之島（大坂部四上）



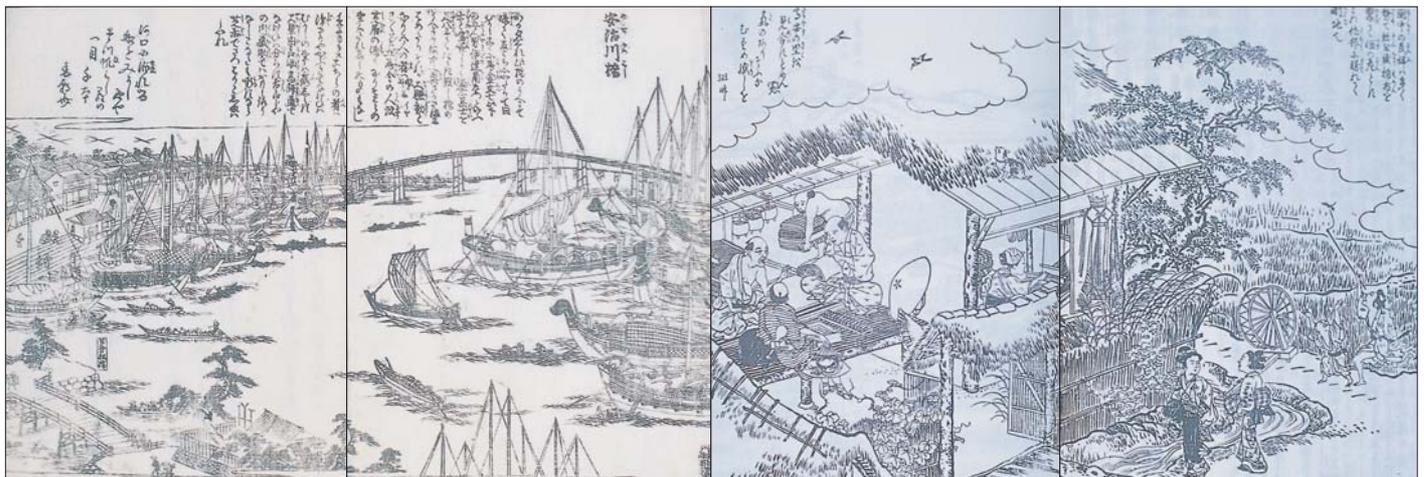
摂津名所図会

ところで、古来中国で「南船北馬」とされているように、地理的な条件によれば、交通手段に海川を用いた船のルートが存在することは、狭い日本でも同様である。特に難波より発する瀬戸内海の内海運は、遣隋使、遣唐使の時代から独自の発達をし、人々の、モノの流通を支えてきた。中世においても、日本海海戦の戦術資料となる村上水軍に見るような瀬戸内水軍、さらに勘合貿易、南蛮貿易、後の朱印船貿易などによって、



2) 東廻り航路・西廻り航路および九州航路

[写真左] 5) 摂津名所図会 安治川 (大坂部四下)
 [写真右] 6) 河内名所図会 高安の里の木綿買



海運技術は飛躍的に発達し、瀬戸内海、太平洋の海運がますますの隆盛を迎えたのは周知のことである²⁾。

近世となり、米中心の租税制度を基盤とした江戸幕府のもとでは、米の大量輸送、米の売りさばきが必要となってくる。すでに豊臣秀吉政権の頃より、その集積地は大坂となっており、政治機構が江戸に移されても、経済拠点は変わらなかった。やがて、経済拠点も江戸へと移行していくが、江戸の明暦の大火 (1657年)

などの影響もあり、少なくとも17世紀までは日本の海川交通、経済の拠点は、大坂、そして、その周辺の上方向と呼ばれていたところにあった^{3)~5)}。

交通、経済の発展は、ヒト、モノの交流を活性化させる。それは何よりもカネを生み、文化を育むこととなった。ここに上方文化が誕生したといえる。

【Ⅱ】上方文化の基盤形成～川運～^{せんうん}

農耕を産業の中心にした時代において、関西における最大にして最高に肥沃な平野、河内平野は、多くの実りと繁栄をもたらした。さらに現在の東大阪付近の湿地が干拓され、田畑として利用される近世には、商都大坂を支える農業生産基盤となっていた。

ところで、天下人の野望の権化、豊臣秀吉の文禄・慶長の朝鮮への侵略（1592・1597年）は、さまざまな悲劇を生んだことは言うまでもない。日本人はその軍事的な侵略に及んで初めて、我々より進んだ朝鮮文化の数々を目の当たりにする。出版技術、陶芸技術などは最たるものであるが、衣服の繊維技術において優れた木綿種にめぐりあったことは大きかった。

河内は、元来木綿栽培地であったが、侵略後この朝鮮種の木綿が栽培されるようになった。朝鮮種の木綿は在来種より綿糸としての質がよく、やがて河内平野ではことごとく朝鮮種木綿が作付けられ、その綿布は質の面で全国の在来種のそれをはるかに凌駕し、河内木綿は全国に名を轟かすこととなる⁶⁾。

当時、木綿の肥料に最適とされたのは、干鰯^{ほしか}であった。近世初頭、和歌山沿岸の漁民たちは新しい、底引き網等の漁法を工夫し、鰯の漁獲量を格段にふやしていった。その技術は、瞬く間に大坂湾、西宮浜など関西にも広がり、やがて、遠く千葉の九十九里浜、対馬、壱岐など全国にまで伝播することになる。

したがって、この関西における干鰯の大量生産は、河内木綿の大量生産につながった。干鰯は海に面していない河内木綿作付け地の隅々までも、川を利用して配送されることとなったのである⁷⁾。

川を中心は大和川であった。この川を利用すれば、下流河口では大坂湾に通じていた。そこからは日本全国につながる海の航路につながっていたのである。

河内で生産された河内木綿の名は良質な綿布として、1650年頃には、日本全国に知れ渡るようになった。正確な数字は提示できないが、生産量もおそらく全国一であったと考えられる。

河内平野の隅々から小舟で集められた木綿、あるいは綿布は、大坂で集積され、五百石クラスの船で全国へと出荷されていった。



7) 撰津名所図会 永代浜干鰯市（大坂部四下）

そして、逆のルートでは大坂から河内の隅々まで干鰯が届けられた。

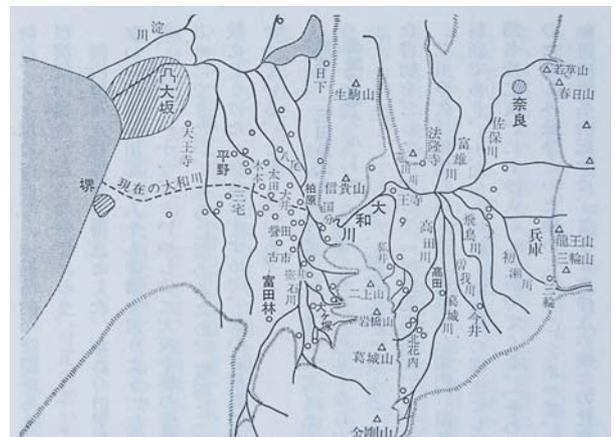
このルートが大和川の川運として、ヒト、モノを交流させ、それに連なる人々を富裕にさせたことはいうまでもない。

こうした大和川周辺の裕福な人々は実業家として、資本をふやしていくが、また文化人として文学にもかかわっていった人々も多かった。

その典型的な例としてあげられるのが、大和川川運ルートのリーダーであり、河内俳壇のリーダーでもあった三田浄久^{さんだじょうきゅう}である。

今田洋三氏は、三田浄久の大和川水系を中心とした河内俳壇の形成を指摘され、さらには俳諧文化圏を支えた教養源として、貸本屋ルートを大和川に求めて論を展開されている^{8)~11)}。首肯できる手堅い研究として、高く評価すべきだと考えている¹²⁾。

元来、河内は近世以前から文学の発展した地域であった。旧領主三好長慶・実休（義賢）・冬康の三兄弟は「いづれも連歌の好士、器用人」（『天正慶長当代記』）



12) 三田浄久の俳友の分布図



8) 正本屋と絵及紙売り



9) 西村重長筆 三条勘太郎・書物いろいろ (リッカー美術館所蔵)



10) 奥村政信筆 うす物売り (リッカー美術館所蔵)



11) 本朝櫻陰比事 卷一の四「太鼓の中はしらぬが因果」

と記されているが、領主にならい、連歌は庶民の間でも広がりを見せていた。長慶の家臣で権勢家松永久秀もその中に入った。子は永種、孫こそは松永貞徳である。この松永貞徳は近世俳諧の最初の門流、貞門派の宗匠であるが、貞徳は三田浄久の師。河内出身者と貞門派のつながりはここから始まっているといえよう。

貞門派と拮抗した談林派の雄に西鶴がいるが、その遺著『西鶴名残の友』巻二の二「神代の秤の家」で、三田浄久を主人公としている。

内容は、貞門派の後継者貞室が柏原の三田家に遊んだ際のエピソード。貞室が京より持参した楽器、琵琶

は、大きなケースに納まっていたが、家業に励む河内の者たちには、その風雅がわからず、その形状から商用の天秤ケースの大きいものと理解し、「神代の秤」と言ったという話である。

このエピソードは三田浄久を中心とした河内俳壇が貞門派の宗匠貞室を迎えるほど隆盛であり、本格的な活動を見せていたことを知るとともに、実業者俳壇の無風流を揶揄しているとも考えられる。

しかし、いずれにしても大和川にはその川運拠点に俳人がおり、河内の産業を支えるとともに河内俳壇を支えていたことがわかるのである。

【Ⅲ】西鶴の出現

～大坂を中心とした読者の誕生～

西鶴¹³⁾は若くして、俳諧の道に入っている。江戸時代の俳諧と言え、何と言っても松尾芭蕉〔正保元(1644)年～元禄七(1694)年〕であるが、まったく同時代に生きた芭蕉が江戸で本格的に蕉風俳諧を確立していくのは三十歳代からである。ところがその頃西鶴はすでに、全国的に隆盛であった談林俳諧の西山宗因のもとで、誰もが知っている俳諧の大師匠として活躍していた。

でもなぜか、西鶴は俳諧人生絶頂期のまま、初の浮世草子『好色一代男』を板行する。四十一歳のときであった。四十三歳のときに、大坂住吉神社で矢数俳諧を興行し、一日一昼夜二万三千五百句の独吟をするという大記録を作るが、これを機に西鶴は俳諧活動より浮世草子作家として活躍する。五十二歳で病没するので浮世草子作家としては実働約十年にすぎないが、没後の作品も含めれば、二十数作品もの優れた浮世草子作品を残している。作品はいずれも短編集。代表的な作品は好色物として分類される『好色一代男』『好色二代男』『好色五人女』『好色一代女』『男色大鑑』、武家物『武家義理物語』『武道伝來記』、町人物『日本永代蔵』『世間胸算用』、奇談物『西鶴諸国はなし』『懐硯』、裁判物『本朝櫻陰比事』、没後『西鶴置土産』刊。巻頭に辞世句、肖像をのせる。また『西鶴織留』『西鶴俗つれづれ』『萬の文反古』『西鶴名残の友』など、第一遺稿集から第五遺稿集まで刊行されている。この驚異的な生産ペースは、あの夏目漱石とほぼ同じである。

それらの作品の文芸性の高さは、江戸時代の昔から有名な文豪たちや研究者たちを驚かせてきた。その面の研究はすすんでおり、今さら言うまでもない。

西鶴に対する驚きは、このような数の多さだけではなく、登場人物が、当時実際に実在した有名な武士、町人、遊女、歌舞伎役者から無名な市井(しせい)の人々まで及ぶ視野の広さにある。加えて、その人々が日本全国津々浦々にすむ諸国話となっていることも注目できる。北は松前(北海道)や酒田から、南は鹿児島、長崎、南洋の島、異界と多岐にわたる国々が舞台であるから、空間的広がりには限りなく、奇想天外と言



13) 西鶴肖像 (『西鶴置土産』所収)

わざるを得ない。

【Ⅳ】西鶴本の売価

西鶴本の売価¹⁴⁾は、当時の庶民の生活水準からは高い買い物だったことがわかる。例えば、『好色一代男』八巻八冊が銀五匁といえ、現在の物価水準で約1万円である。よほど酔狂な金持ちでないと、『世間胸算用』に登場するような日々の糧を得るに追われる人々では手が出ない代物であった。では、読者がつかなかったかということそうではない。貸本屋については先に述べたが、貸本を利用すれば安価で読むことができた。逆に原本の高さを貸本制度が支えて読者を広範囲に獲得したと言えるのである。

好色一代男	八巻八冊	天和二年	銀 五 匁
諸艶大鑑 (好色二代男)	八巻八冊	貞享元年	四匁五分
好色五人女	五巻五冊	貞享三年	二匁八分
好色一代女	六巻六冊	貞享三年	三匁五分
男色大鑑	八巻八冊	貞享四年	八 匁
武道伝來記	八巻八冊	貞享四年	五 匁
日本永代蔵 (美濃版)	六巻六冊	元禄元年	三 匁
日本永代蔵 (半紙本)	六巻六冊	元禄元年	二匁三分
武家義理物語	六巻六冊	元禄元年	四匁五分
本朝櫻陰比事	五巻五冊	元禄二年	三匁五分
西鶴置土産	五巻五冊	元禄六年	二匁六分
萬の文反古	五巻五冊	元禄九年	二匁五分

14) 西鶴本の売価 (『増益書籍目録大全』元禄九年刊より)

【V】関西学院大学の西鶴本

現在、関西学院大学図書館には次の五種の西鶴本原本を有している。

①『好色一代男』

天和二（1682）年十月、荒砥屋孫兵衛可心を版元として刊行された。西鶴の処女作である本作は、おそらく俳諧師西鶴の片手間仕事の「転合書」であったかもしれないにもかかわらず、たちまちにして評判となった。その様相は、荒砥屋版の増刷、より広い読者に広めるべく同一の版木を用いた秋田屋市兵衛版の再版本、三版本（大野木市兵衛版、ただし大野木は秋田屋と同一書肆）の刊行によって簡単に裏付けられる。また、貞享元（1684）年三月のいわゆる江戸版の初版（新た

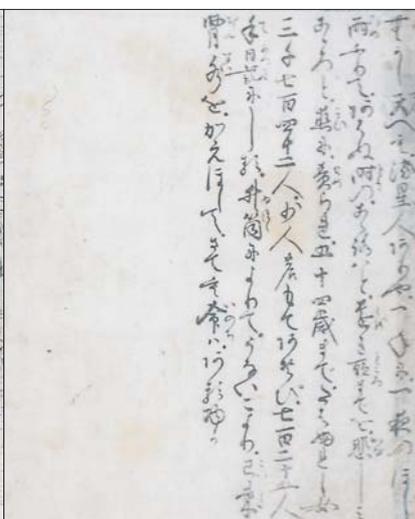
に江戸で板木を作成、挿絵には菱川師宣を起用した、川崎七郎兵衛版行のもの）、貞享四（1687）年九月の第二版（大津屋四郎兵衛版、板木は川崎版に同じ）、刊年不明の第三版（万屋清兵衛版）によって、上方のみならず江戸でも大好評を博した。このような『好色一代男』の好評は、俳諧師西鶴から浮世草子作者西鶴への転身をうながす結果となったのである。『好色一代男』は八巻八冊本から成るが、関西学院本は初版本と考えられるものの巻1から巻4まで所蔵している^{15)~17)}。



15) 好色一代男



16) 好色一代男（巻一）



17) 好色一代男（巻一）

②『本朝櫻陰比事』

元禄二（1689）年、萬屋清兵衛（江戸）、鳶金屋庄左衛門（大坂）刊。京を舞台とした裁判物の短編集である。五卷五冊からなり、題簽の巻数表示はそれぞれ「ちゑ 小判一両」「ふんへつ 小判二両」「しあん 小判三両」「しひ 小判四両」「かんにん 小判五両」と趣向が凝らされている。

巻一の一で述べられる通り、本作は中国宋代の裁判物「棠陰比事」を意識しており、さらに「京都を舞台とした裁判物」という点からは『板倉政要』との関係が指摘できるだろう。「比事」という素材は先の『西鶴諸国はなし』にすでに見出すことができ、西鶴の話の

種収集のテーマの一つであったといえる。この裁判という話題が当時の読者の耳目を引いたことは、二種の再版本や多くの追随作が示す通りである。

また、百余歳の翁が語り手となる『翁物語』としての方法や、作中の人間認識の問題など、晩年の西鶴文芸の展開上、注目すべき作品である。

関西学院大学本は「鳶金屋」の部分「柏原清右衛門」（大坂）に埋木改刻されている再版本^{18)~20)}であるが、巻二最終話の挿絵がないこと以外は初版本と同じ板木を用いている。なお、本作品の版下文字は西鶴自筆と認められている。



18) 本朝櫻陰比事



19) 本朝櫻陰比事（巻一）

20) 本朝櫻陰比事（巻三）

③『世間胸算用』

元禄五（1692）年正月、京都上村平左衛門・江戸万屋清兵衛・大坂伊丹屋太郎右衛門刊。西鶴の作かどうかわからない存疑作『浮世栄花一代男』を別とすれば、西鶴生前に刊行された最後の作品である。

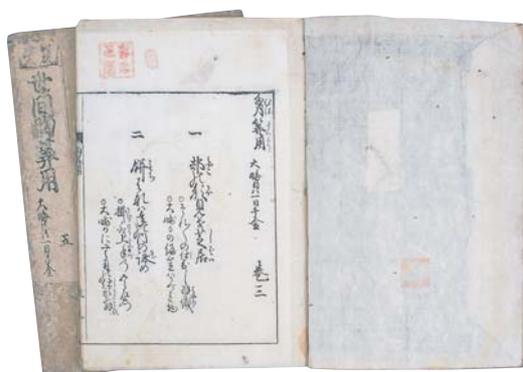
本書の序文に「一日千金の大晦日を知るべし」とあり、外題副題や目録題に「大晦日ハ一日千金」とあるように、多くの章が、一年最後の最大の収支決算日である大晦日の出来事という時間設定で書かれている。上層から下層までの様々な商人の大晦日の過ごし方、掛け乞いとこのやりとりが描かれている。

西鶴町人物の最優秀作品との定評もあり、その最後の到達点を示す作品である。大晦日という時間設定とそれを生かした卓抜な話の構成、時代の底辺を生きる

人間たちの「衰れにも又おかし」き生への幅広い認識、浮世の実相の具体化等々、世の人心に終生関心を持ち続けて創作してきた西鶴の面目が十分に発揮されている。

関西学院大学本は二本ある。一本は元禄十二（1699）年の第五版本で巻三と巻五のみ存する²¹⁾²²⁾。一本は元禄五（1692）年本の五巻五冊の初版本²³⁾~²⁶⁾と見られるが、現段階の研究では、初版本は未発見とされている。

関西学院大学本は、再版本、第三版本と同じ書肆の刊記を持ち、第四版本ではない。しかし、再版本、第三版本とも特徴が微妙に一致しないところから、初版本である可能性が少なくない。現在も精査研究中で、成果が待たれる貴重本である。



21) 世間胸算用 (2冊本)



22) 世間胸算用 (2冊本の内巻五)



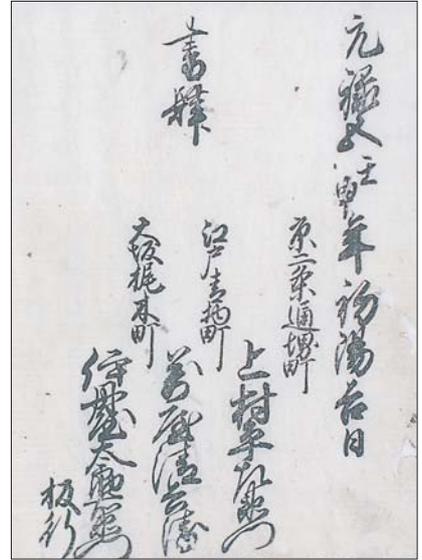
23) 世間胸算用 (5冊本)



24) 世間胸算用 (5冊本の内巻一)



25) 世間胸算用 (5冊本の内巻一)



26) 世間胸算用 (5冊本の内巻五)

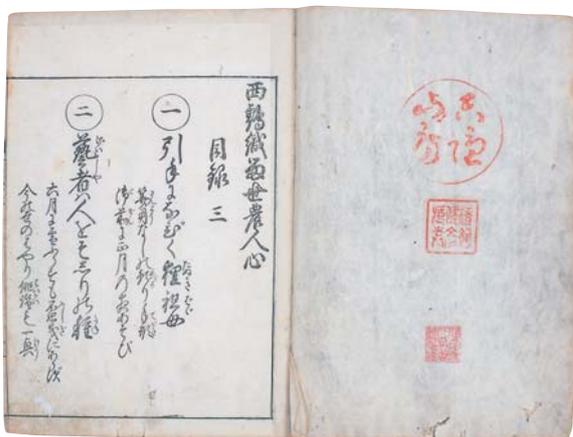
④『西鶴織留』

元禄七（1694）年三月、万屋清兵衛（江戸）・雁金屋庄兵衛（大坂）・上村平左衛門（京）刊。六卷六冊、全二十三章からなる短編小説集。成立時期は『日本永代蔵』と『世間胸算用』の間とされる。その版本は元禄版原刻本と元禄版通行本の二系統に大別される。元禄版通行本には団水の序文が付載されている。団水の序文によると、元来『本朝町人鑑』『世の人心』の書名のもと、『永代蔵』の続編・三部作とする予定であったが、未完のため合わせて一作としたものである。『永代蔵』巻末に予告された『甚忍記』の計画を変更したの

が『本朝町人鑑』『世の人心』となり、未完のまま『織留』に編入されたとされる。

『本朝町人鑑』は始末・堪忍を旨とする到富・町人道を描き、『永代蔵』の続編としての性格を持ち、『世の人心』はより広範な人々の「心」の変容を写しており、生涯探究の主題をその一言に代弁させている。本作は『永代蔵』から『胸算用』への過渡相を示すと考えられる。

関西学院大学本は巻三²⁷⁾~²⁹⁾のみ現存のため、初版か否かの確認ができていない。



27) 西鶴織留



28) 西鶴織留 (巻三)



29) 西鶴織留 (巻三)

《参考文献》

- ・ 柚木学編『日本水上交通史論集』第1～6巻、文献出版、1986～1996年
- ・ 小林茂・脇田修著『大阪の生産と交通』毎日放送文化双書4、毎日放送、1973年
- ・ 今田洋三著『江戸の本屋さん』NHKブックス、日本放送出版協会、1978年
- ・ 柏原町編『柏原町史』柏原町史刊行会、1955年
- ・ 日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典』岩波書店、1983～1985年

※一部、2004年12月9日 第8回MKCR（武庫川女子大学関西文化研究センター）セミナーで森田が行った報告に基づいている。

※西鶴本書誌の基本解説については、森田ゼミの院生にお願いした。石田賢司・高瀬麻規人・西浦和稔・寺敬子・高橋隆平・長戸麻美・池田駿之・村田俊人である。協力に記して感謝する。関学本の特徴に関しては森田が責任担当した。

注：写真引用文献

- 1) 谷協理史編『新潮古典文学アルバム 17 井原西鶴』新潮社、1991年、芳賀一品画「浪華西鶴翁像」
- 2) 豊田武、児玉幸多編『交通史：体系日本史叢書24』山川出版社、1970年、「東廻り航路・西廻り航路および九州航路」
- 3) 『摂津名所図会』大坂、河内屋喜兵衛、寛政10（1798）年、大坂部四上、「八軒家」
- 4) 『摂津名所図会』大坂、河内屋喜兵衛、寛政10（1798）年、大坂部四上、「中之島」
- 5) 『摂津名所図会』大坂、河内屋喜兵衛、寛政10（1798）年、大坂部四下、「安治川」
- 6) 秋里籬鳥著『河内名所図会』臨川書店、1995年、「高安の里の木綿買」
- 7) 『摂津名所図会』大坂、河内屋喜兵衛、寛政10（1798）年、大坂部四下、「永代浜干鯛市」
- 8) 長友千代治著『近世貸本屋の研究』東京、東京堂出版、1982年、『用捨箱』所載、延宝、天和頃の正本屋と絵双紙売り

- 9) 長友千代治著『近世貸本屋の研究』東京、東京堂出版、1982年、西村重長筆、三条勘太郎・書物いろいろ（リッカー美術館所蔵）
- 10) 長友千代治著『近世貸本屋の研究』東京、東京堂出版、1982年、奥村政信筆、うす物売り（リッカー美術館所蔵）
- 11) 『本朝櫻陰比事』大坂、柏原清右衛門、元禄2（1689）年、巻一の四「太鼓の中はしらぬが因果」
- 12) 今田洋三著『江戸の本屋さん：近世文化史の側面』NHKブックス299、日本放送出版協会、1977年、「三田浄久の俳友の分布図」
- 13) 近世文学書誌研究会編『西鶴置土産』近世文学資料類従西鶴編15、勉誠社、1975年
- 14) 『増益書籍目録大全』元禄9年刊より、「西鶴本の売価」
- 15)～17) 『好色一代男』出版地、出版者不明、天和2（1689）年？
- 18)～20) 『本朝櫻陰比事』大坂、柏原清右衛門、元禄2（1689）年
- 21)・22) 『世間胸算用』大坂、萬屋彦太郎、元禄12（1699）年
- 23)～26) 『世間胸算用：大晦日ハ一日千金：絵入』大坂、伊丹屋太郎右衛門、元禄5（1692）年
- 27)～29) 『西鶴織留：世農人心』出版地、出版者、出版年不明

森田 雅也（もりた まさや）

関西学院大学文学部教授

兵庫県出身。1958年生まれ。関西学院大学文学部卒業、同大学院修了。博士（文学）。

近世日本文学、就中、西鶴文芸の大系化、近世前期上方文化における文芸世界の展開、近世後期荷田在満等国学者サロンの形成を研究課題とする。

著書に『西鶴浮世草子の展開』和泉書院、2006年、編著に『西鶴諸国はなし』和泉書院、1996年、『近世文学の展開』関西学院大学出版会、2000年、共著に『新編西鶴全集』勉誠出版、2000年、『西鶴が語る江戸のミステリー』ペリかん社、2004年他。